

令和3年度第2回野洲市総合教育会議

○日 時 令和4年2月2日

開会時刻 13時30分

閉会時刻 14時55分

○場 所 野洲市役所 第一委員会室

○出席者

□野洲市

市長 栢木 進

政策調整部長 赤坂 悦男 政策調整部次長 川尻 康治（兼財政課長）

企画調整課長 小池 秀明

□教育委員会

教育長 西村 健

委員 瀬古 良勝 委員 南出 久仁子

委員 山崎 玲子 委員 本田 亘

教育部長 吉川 武克

教育部政策監（幼稚園教育担当） 田中 源吾

教育部次長 北脇 康久

教育部次長（学校教育担当） 井上 善之（兼学校教育課長）

教育部次長（文化財担当） 進藤 武（兼文化財保護課長）

学校教育課参事 井関 保彦

生涯学習スポーツ課長 井狩 吉孝

こども課長 西村 一嘉

こども課主席参事 松村 圭子

教育総務課長 鎌田 征隆

教育総務課職員 枝 瑞紀

## 令和 3 年度第 2 回野洲市総合教育会議

令和 4 年 2 月 2 日

【北協教育部次長】 ご案内の時刻となりましたので、これより令和 3 年度第 2 回野洲市総合教育会議を開会いたします。なお、議事録作成と記録のため、本日の会議は録音及び写真撮影をさせていただきますので、あらかじめご了解をお願いいたします。

それでは、市長からご挨拶をお願いいたします。

【栢木市長】 皆さん、こんにちは。本日は大変お忙しい中、教育長及び教育委員の皆様方には、令和 3 年度第 2 回野洲市総合教育会議にご出席を賜り誠にありがとうございます。

本会議は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第 1 条の 4 の規定に基づき開催するものです。本日の会議では、昨年 7 月に開催しました第 1 回総合教育会議におきまして、一部触れておりました野洲市コミュニティスクールの推進について協議させていただきます。限られた時間ではありますが、忌憚のないご意見をいただきますようよろしくお願い申し上げます。

それでは、担当者から報告を受け、協議に入りたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

【北協教育部次長】 それでは、次第 3 の議事に移ります。議題 1、野洲市コミュニティスクール推進に向けた進捗状況について、井上次長より報告をさせていただきます。

【井上教育部次長】 皆さん、後ろのスクリーンをご覧ください。

コミュニティスクールとよく言われていますが、コミュニティスクールというのは左側にあります、学校運営協議会のことを言います。これは、学校と保護者と地域の皆さんが共に知恵を出し合って学校運営に意見を反映させることで、一緒に動きながら子どもたちの豊かな成長を支えていく、地域と共にある学校づくりを進めていくという観点で行っていくのがこのコミュニティスクール、学校運営協議会でございます。

もう一つが、地域学校協働活動でございます。幅広い地域住民の参画を得まして、地域全体で子どもたちの学びや成長を支えるとともに、学校を核としたまちづくり、地域づくりを目指して地域と学校が相互に、パートナーとして連携・協力をしていく、協働していく、そういう様々な活動を総称して地域学校協働活動と言います。

このコミュニティスクールは、学校評議員会がどちらかという意見をいただくことが中心でしたが、そういう組織から一緒に行動できる組織に変えていく、これがコミュニティスクールでございます。メンバーは校長や教頭、それから運営協議会委員、これは地域から出ていただきます。それから地域学校協働活動推進員が現在それぞれの学校に 1 人ずつおられますが、この方々も中に入っていただこうと思っております。

地域学校協働活動というのは、頼まれたことだけをやるという組織から、参画して子どもを育てる組織へと変わっていくものでございます。今まではどちらかという、学校からこういうことをしてほしいと頼まれてやっていたところが、私たちこういうことができます、私たちのグループは学校に対してこういうことができますと言ってくれることに対して、

学校はそれを受け入れて、実際に一緒に子どもたちを育てていくのが地域学校協働活動でございます。

これは前回もお話したのですが、一緒に子どもを育てるということは、同じ目標を持っていないと駄目だということになります。学校はこういう子どもを育てたい、けれども地域は全く違うことを考えているということになると駄目ですので、学校も地域も時間をかけて、「うちの地域の子どもたちはこういうふう育てていこう」ということを熟議していきたいと思っております。年に1回、2回顔を合わすだけではゆっくり話をすることもできませんし、信頼関係を持って共に子どもたちを育てていこうという関係にはなりませんから、普段から顔を合わせて話せるような関係になっていけたらと思っております。

ただ、地域の中には、「学校は敷居が高い」というお声もございます。それについては学校を核にしたまちづくりの取り組みで、学校の敷居をどんどん下げていこうと考えています。その際に、実際に目標を立てるわけですが、抽象的なお題目にならないようにしなければなりませんし、これも後ほど言いますが、新しいことをやろうということになりますと、今の学校は本当に忙しいですから、それはできないということになってしまいますので、新しい事業ではなく、今やっている行事を地域の方と共にやっていこうという視点で地域学校協働活動、コミュニティスクールを進めていきたいというふうに思います。

それから、3つ目は、校長が変わったらまた一からやり直しでは困る、人が交代しても持続可能な仕組みにしていく。それから4つ目、学校にもいろんな課題がありますし、地域の課題もあるわけですが、今まで学校だけでやっていたことをいかに地域に託していけるかということです。例えば、他市で実際に行っていることですが、どうしても行き渋っている子を朝迎えに行きたいが学校にはそういうことに割ける人員がないというときに、地域の方が「私よく知っているから迎えにいこうか」と言ってくださったときに、学校が安心してその方に託することができるのかということです。今の学校は守秘義務の問題や家庭のこともあるからとかで、なかなか地域に託することができなかつたのですが、これからはお互い信頼しながら託していけるところは託していく方法を学校も考えていかなければならないと思いますし、未来の子ども像や地域像を見据えた取り組みになっているのかということも考えなければなりません。

野洲のいろんな自治会の方の声を聞いていますと、「うちの地域ではそんな無理です」と言われる地域も当然ございます。地域もできることとできないことがありますし、そういうことも考えながら、何とか地域の活気を取り戻そうと、貢献できるような事業にしていかなければならないと思っております。

他市の例ですが、写真をご覧ください。上のほう、学習支援というものでございます。これは、学力の二極化によって、学習面が非常にしんどい一部の層がございまして。そういう層の中には、主に家庭の中で学習環境がない子、あるいは経済的に不安定で塾等にいけない子。あるいは学習の困難さを抱えている子どもたちがいます。そこで、地域の方々「やります」と、この写真は土曜日の様子です。学校の教員は一切いません。これはほぼマンツーマンでやるのですが、全部学生ボランティアや地域の方々です。学校は土曜日に場所だけを貸して

いるという状況です。これもどれだけ学校がこういう人たちに託せるのかということでございます。ここからがこの地域のすごいところで、この後子ども食堂をします。子どもたちが勉強している間、「勉強を教えるのは難しいけどお昼ご飯をつくります」という方々が家庭科室で調理をしておられる。中には、一緒に私も作りたいという子は、この真ん中の写真のように一緒に料理をしています。ここは食材も寄付してくださる方がいます。こういう食材の寄付を受けて子ども食堂をして、午前中頑張って勉強して、生活環境の厳しい子たちにお昼ご飯を提供して解散をすると、こういうイメージでございます。

それから、次のページの「ほたる祭り」ですが、地域が毎年祭りを行っているんですが、年々参加者も少なく、やる者もいなくて困っているといったときに、学校が子どもたちを巻き込んで一緒にやりましょうというのがこのほたる祭りです。一番左の写真、子どもたちが焼きそばを作っています。ついつい学校は子どもにさせて火傷をしたらどうするのかとか、食中毒になったらとかで二の足を踏んでしまうのですが、子どもたちに任せていこうということです。真ん中の写真は、司会をしているのは地域の方ですが、子どもたちが協力してステージ発表を盛り上げていく。それから、出店も地域の中学生が手伝っているということです。今まで子どもたちも祭りに参加するだけだったのですが、今度は子どもの主体性を引き出して活動に参加させていこうという取り組みです。

この下の高齢者サロンというのも、今までは地域のお年寄りの話を聞こうということで終わっていたのが、地域学校協働活動になってからは子どもたちが企画をします。企画をして、この写真ではおはじきをやろうと。ところが子どもたちが考えてもそんなすんなりうまくはいきません。なぜかという、この手前に写っているおじいさんは、「おはじきは嫌だ」と言ってやらない。終わってから、ここの企画をした子どもたちが何が駄目だったのかをまた考えるわけです。そして次に活かします。そしたら、次はおはじきだけではなく、おじいちゃんができる、例えばコマ回しとかめんことかそういうこともやろうということで、子どもたちが自分で主体的に企画してそれを実践し、反省もして、それを次に活かすというところを行っています。これもコミュニティスクール、地域学校協働活動のイメージでございます。

次に、野洲市でこれからやっていこうというコミュニティスクール、地域学校協働活動で大事にしていくことは何かということですが、これからの社会で求められる力は何かということと関係がございます。この変化の激しい時代の中で、人から言われてからやるということではなく、主体的に自分で判断できるということを大事にしていこうと思っています。

野洲市の子どもたちは、全国学力・学習調査でここ数年ずっと課題になっているのが、自分の考えをつくって表現するということです。自分で主体的に考えて判断する、あるいは多様な人々と協働していく。一人でするのではなくいろんな人と協力して動く、それから新たな価値を創造していくとともに、新たな問題の発見・解決に繋げていくことを、先ほどお話しした学習支援であったり、子ども食堂であったり、ほたる祭りであったり、あるいは高齢者サロンという取り組みを通してこういう力をつけていけないかと思っております。

そして、その下の自転車の写真、野洲市のコミュニティスクールをバックアップしていただいている文科省のコミュニティスクールアドバイザーの高木先生から拝借した図なので

すが、コミュニティスクールは自転車なんだと。前輪が学校運営協議会、後輪が地域学校協働活動、この自転車のハンドルを握っているのが校長、そしてこの自転車は電動自転車なのですが、バッテリー部分が行政だということで、ペダルを漕いでいるのが地域の皆さんと学校の教員。こうやって自転車を前へ進めていこうということでございます。

これは7月にもお示ししたのですが、今まではコミュニティスクールを進めていくにも大きな発想の転換が必要なのですが、学校の行事に参画していくとなると子どもたちをお客さんにして参加するだけということになりがちなのですが、そうではなく、子どもたちも一緒に考える。先ほどの高齢者サロンのときにも言いました、今まではお年寄りの話を聞くだけだったところが、自分たちで遊びを考える。失敗してももう一回その反省を活かすということでございます。これには当然時間も手間もかかります。ですから、この時間と手間をどう生み出していくのかが一つの課題でございます。当然、学校と地域が役割分担をしながら、地域も共に子どもを育てていくわけですから、その子どもたちが次の地域の担い手になっていきます。地域がそういうことでどんどん活性化していくと、当然学校も活性化していくということで、学校を核としたまちづくりにつながっていくのではないかと思います。

それから、準備会を何とか4月からスタートできないかと考えております。まず人選をどうするのかということですが、あまり人数がたかさんいてもしょうがないので、少人数で機動性あって子どもたちのために動ける、そういう方たちをメンバーにしていきたいと思っております。そのメンバーは子どもたちにどういう力をつけていくのか、どう育てて地域の担い手になってもらうのかということ、地域と学校で話し合っていきます。

それから、説明会をしなければならぬとも思っています。実は、皆さんにはこうやって説明をしていますが、まだPTAにも説明をしておりません。そういう機会を持つ必要があると考えています。それから自治会の方々にも説明をしておりませんので、説明をしなければならぬと思っています。

それから、一定のルールを設けてこの活動を進めていこうと思っておりますので、規則の制定、あるいは改正も必要ですし、最終的には学校運営協議会にも図っていきたくと思っております。これを来年度1年間ぐらいかけてやっていけないかと思っております。

このコミュニティスクールを推進していくために、7月に皆さんに説明をしてから約半年間いろいろ動きをつくってきたわけですが、その中で出てきた意見で、「これ以上学校で新しいことはできない」「先生方の負担が増えるのは困る」という声が非常に多かったです。それに対してどうお答えをしているかという、「今やっている事業を見直していくんです」という説明をしています。それから、不登校対策、あるいは学習支援、実際写真で見ていただきましたが、ああいう地域人材が活躍できるということを考えられないかということも提案しております。学校がどれだけ地域に委ねられるかという問題が非常に大きいなと思っております。また、ある学校の意見では、「〇〇教育が求められています」と。今日の午前中も定例校長会があったのですが、草津税務署の方が来られて税の教育をぜひという声もありますし、とにかく学校には〇〇教育をしてほしいというのが多いんです。これ以上地域の方に入ってもらってできるのかというお声もございます。その中でお答えしているのは、

年間の授業日数が決まっている中で、何時間ぐらいだったら地域の方と一緒に学べるのかということは学校がカリキュラムを点検して、年間 20 時間ぐらいだったらできるのではないかと考えてもらわないといけませんし、それを学校運営協議会の中で検討してもらいたいと思っています。キーワードは 3 つで、「調整」「連携」「協働」の 3 つをキーワードにできないかということを学校には説明をしています。

以上です。

**【栢木市長】** ありがとうございます。ただ今の報告について皆さまの忌憚のないご意見をいただきたいと思います。どうでしょう、何かございませんか。

教育長。

**【西村教育長】** 教育長の西村です。このコミュニティスクールは文科省が 5、6 年前からずっと進めてきて、今全国で 3 割ぐらい立ち上げをされています。過去 5 年間、文科省は、学校においては「努力義務」という形でできるだけ作ってくださいという方向でした。来年度、まだどうなるかということのはっきりとは見えていないんですが、どんどん作ってくださいという状況になっていくのではないかと捉えています。県内でも結構な市町が作っておられますので、野洲市としても、その方向に乗っていかうということで進めている状況です。

**【栢木市長】** ありがとうございます。

瀬古委員、どうぞ。

**【瀬古委員】** 教育委員の瀬古でございます。

コミュニティスクールは、説明にもありましたように、今まで保護者や地域住民が学校に対して受け身的な関わりだったものを、能動的な、学校と地域が目標を共有して対等な形で運営に携わるという考え方に変えるということです。今日社会経済情勢が大きく変化している中で、きわめて良いことだと思います。

今、教育長からも話がありましたように、コミュニティスクールの制度自体は平成 29 年に設立され、県内でも半数ぐらいの小中学校がすでに取り組んでいるということでありま。しかし、今ある学校評議員会をそのまま学校運営協議会と読み替えたり、学校応援団が地域学校協働活動へそのままスライドしているだけの市町が多いことも聞いています。

野洲市は今から準備会を立ち上げる段階だそうですが、今までの保護者や地域の受動的な関わり方が、この資料でいう「熟議」で、少し話し合いをすれば変わるという簡単なものではないと思います。コミュニティスクールの理念に沿う組織に作り上げていくには、相当時間をかけた深い議論が必要だと思います。

前回の総合教育会議でも申し上げましたが、コミュニティスクールは保護者や関係団体を束ねている方々や学校に様々な関りを持っている方々が学校運営にも関わるという制度ですので、例えば校長先生が作成される学校運営の基本方針にも意見が言えるし、教員の任用についても意見が言えるとなっています。かなり権限を持った組織になるということだと思います。そうすると、地域の権限というのが大きくなりすぎる可能性がないのかということです。先ほどの自転車の絵のように、その関係のバランスが取れているときは良いです

が、メンバー構成によっては地域の力が強くなりすぎる可能性がないのかという点が気になります。

それから、今までは、学校から頼まれて人選をしているケースが多いと思いますが、このコミュニティスクールの適任者の選定というのはなかなか難しいと思うのです。だから、今の説明にもありましたように、まず準備段階から時間をかけてやっていく中で、共通の目標に向けて取り組むコミュニティスクールを作ろうと思えば思うほど、軋轢も生じます。コミュニティスクールは様々な本音の議論の結果として出来上がっていくものだろうと思います。当然、学校あるいは学区ごとで環境や状況が違うので、学校と地域が話し合う中で課題の共有やお互いの信頼を深めていくプロセスが大事だと思います。

一方で、前回の総合教育会議では、教育基本計画がテーマでしたが、令和3年度から令和7年度までの5年間の計画期間でこのコミュニティスクールの展開を図ると記述されています。今の井上次長の説明ですと、来年4年度からということでしたので、その5年間の途中で展開を図るところまで到達できるのかが少し気になるところです。教育委員会として、現時点でそれぞれの学区のこのコミュニティスクールについて、レベルの差、状況の違いもあると思いますが、その辺りをどのように把握されているのか。それから、学区の取り組みに対して、教育委員会としてどのように関与していくのかをもう少し具体的に教えていただければと思います。

しかし、いずれにしてもこのコミュニティスクールは、資料にあるように、持続可能な仕組みに持っていくことが非常に難しい課題ですが、それを乗り越えて将来を見据えて、優れたコミュニティスクールを作っていただきたいと思います。

【栢木市長】 ただ今のご意見に対しまして、井上次長。

【井上教育部次長】 瀬古委員がおっしゃってくださったように、熟議と言いましても、やりだしたら時間もかかりますし、確かに軋轢を埋めていく、考え方の違いを埋めていくというのは気の遠くなる作業になるのではないかと考えているんですが、イメージとしましては、熟議が整ってからしか動けないということではなく、一旦いろんなことを地域とともにやってみて、お互いがこれぐらいならできるかなと、学校もこれぐらいなら地域に委ねられるかなということを試行錯誤していきながらという形で進められないかというイメージをしています。

それから、お聞きになっていた、地域差がいろいろございます。具体的に言いますと、中主は一幼一小一中ということで、幼小中が連携して目指す子ども像を定めて、幼稚園段階ではこういう子どもにしよう、小学校段階ではこういう子にしよう、中学校段階ではこういう子にしようということをお互い程度決めて、地域と共にやりかけている最中でございます。そういう実際に動き始めている地域から全く動きのない地域までございますから、まだスピードに乗れない学校にはどのように地域と共に進めていくのかということをお互い、スタートの段階で支援ができたらと思っています。

【栢木市長】 瀬古委員が言っておられた、各地域での取り組みをどのように考えているのか、また教育委員会としてどのように関わっていくのかというご質問をされていたと思

いますが、それに関してはどうでしょう。

井上次長。

【井上教育部次長】 実際は少し難しいと思っています。教育委員会事務局の中でもまだ条件の整っていないところもございますし、瀬古委員もおっしゃっていましたが、一つの壮大な事業です。それと、教育委員会だけでできる問題でもなくて、学校を核にしたまちづくりですから、野洲市のまちづくりとしてどのように考えていくのかという課題もございます。祇王学区はどういうまちにしていこう、篠原学区はどういうまちにしていこうというそれぞれのまちの考え方もございますし、地域の独自性ということも緩和しながら、教育委員会と色々な部署とも連携しながら進めていける条件も作っていかねばならないと思っています。

【栢木市長】 今の回答なんですけども、瀬古委員。

【瀬古委員】 私も同じようにおぼろげで、具体的にイメージできないところはあるんですが、おっしゃったように、中主学区のように幼小中でまとまりがある学区もあれば、他府県から転入して来られた方が多い学区もあり、地域差があります。それぞれが主体性を持って取り組んでくださいというお話でもないと思いますし、逆に教育委員会がこうしてくださいというような話でもない。しかし、先ほど言いましたように、教育基本計画では5年間でやろうとしているわけです。国の方向や社会情勢をみても、今までのような学校中心でやっていけるような社会情勢でもないの、考え方自体は美しいものですが、それを現場に下ろしたときにどうしたらそうになっていけるのか、そういう道筋、青写真を教育委員会としてどのようにもっていけばいいのか、その辺りを私自身ももちろんはっきりしないわけですが、事務局としてどんなふうにお考えなのかということをお聞きしたかったのです。

【栢木市長】 はい、教育長。

【西村教育長】 今、瀬古委員が言われたまちづくりとの兼ね合いというところが事務局としても一番悩んでいるところで、例えば、祇王学区ではまちづくり協議会というのがいろんな動きをされています。その絡みで、学校応援団の支援もずっとしていただいています。そういう地域がどんなふうに通学区域化を目指していくのかという部分では、単に教育委員会の問題だけではなく、協働推進課や政策調整部などの絡みが大きいと思うんです。まち全体のことを考えるということについて、教育委員会では「子ども」というところにスポットを当てていますが、地域の大人もそこに絡んできますので、まちづくりにいかに絡めていくのかという部分で、少し悩ましいところかなと思っています。

コミュニティスクールのアドバイザーの高木先生に社会教育委員にもなっていていただきますので、いろんな支援をいただいて年末に各学校を回っていただきました。その中で、各校長が教育委員会はどうしたいのかということのを待っている校長もいます。ですから、地域と全く話し合いをもっていないところもあるし、中主のようにいろんな動きをしているところもあります。先ほど井上次長も言いましたように、統一してできないですから、やはりそれぞれの学区で考えていただかないといけないという思いを持っています。

今日も午前中に校長会がありましたが、校長にも自分の地域のカラーに合わせて自分た



ちでどういうふうにしていけばいいのかを考えてほしいということをお話しました。その辺りが校長によっては、教育委員会が言ってくれるまで待つておこうというところがあるので、そこを考えてほしいというお願いをしました。

以上です。

【栢木市長】 どうでしょうか。他にご意見、ご質問等ございましたら。山崎委員。

【山崎委員】 教育委員の山崎です。次長のご説明やいろいろなご意見を聞いて、コミュニティスクールの整備は必要なことですし、形が整っていけば理想的、素晴らしいことであると思っております。ただ、先ほど瀬古委員が言われた言葉をお借りすると、これから数年間はほとんどの学校が「生みの苦しみ」で、メンバー構成や時間的な制限、どこがリードしながら調整していくのか等、いろいろなことに突き当たっていくのが現実だろうなと考えます。そうしながら少しずつ形を整えていかないと進んでいかないだろうなと思って聞かせていただいていたいました。

先ほど次長の説明の中に、学校がどれだけ地域に委ねられるかというところがあったと思うのですが、その点は難しいところがあります。地域のいろいろな立場の方からご意見、ご要望をいただいた際に、学校が持っている情報等を100%出せないこともあります。また、今地域の中で主任児童委員として動いています、気になる子どもさんを核にして一緒に考えていこうとするときに、学校等から全ての情報をいただけない場合もありますので、どこまでこちらが関わっていけるのかという悶々とした思いを持つときもあります。ケースバイケースで支援の形も異なるので、これから乗り越えていかないといけない大きな課題の一つだと実感しています。

また、4ページにあります「人が交代しても持続可能な仕組み」という点も、重要で難しいことだと思います。学校側も地域側もそこに関わっている人たちが何年も続けていくことでどんどん進んでいく反面、何年かして交代しても、同じく続けていけるような仕組みというのかなり難しく、突き当たっていくのだろうなと思っています。

そういったところを一つ一つクリアしていきながら推進していけるような、まずはメンバー構成から始めていく、それが最初の課題であると思って聞かせていただいていたいました。よろしくをお願いします。

【栢木市長】 ありがとうございます。いろんな課題がある中で、まずはメンバー構成というご意見だったんですけども。

井上次長。

【井上教育部次長】 おっしゃる通り、メンバー構成も難しいなと思っています。ただ、地域の方々の中にはいろんな方がおられて、こういう人もおられたのかということもあったり、子どものために一肌でも二肌でも脱ぐでという方もおられて、そういう人材を学校がどう発掘していけるのかということも問題ではないかと思っています。そのためには、校長は営業マンのようにどんどん地域へ出て、そういう人材を発掘していければということも思っております。

それと、山崎委員もおっしゃってくださったように、地域にどれだけ委ねられるかという

問題ですが、これも他市の例にはなりますが、行き渋っている子のところへ、あまり教師のにおいがしない地域のおっちゃんおばちゃんが迎えに行き、もう学校の始まっている時間ですが、誰もいない通学路を一緒に歩いてその子がいろんな話をする。普通、教師だといろいろ言ってしまうんですが、その方はそういうことを一切言わずに「そうか、そうか」と聞きながら話をし、校門へ入って「行っておいで」と背中をおすと、その子も「わかった、行ってくる」と言って教室へ入っていくとあると。あるいは地域の中で、一人で住んでおられるご高齢の女性の方がおられて、その家に毎日その子が帰りに寄ってこたつへ入ってみかんを1個だけごちそうになって、学校であったことを話して帰っていくと。その方もずっとその子の話を聞いてあげて、だんだんその方も子どもが来るのを楽しみにしていると。こうやって地域と子どもの関わりというのは、いろんなパターンがあって、ほたる祭りのような大きい行事をやることだけではなく、日常の関わりみたいなものが子どもを育てるということにも関わっていることも地域の方にご理解をいただきながら、学校もそういう方にどこまで託せるのかを考えていくというイメージでやっていけないかなと思っております。

以上です。

**【栢木市長】** 難しい回答になりましたけども、校長先生が地域に出て行って地域の方とのコミュニティを深めていくということで、「〇〇校長先生昨日来てはったで」とか、そういう関わりの中から交友を深めていくということだと解釈をしましたが、他にご意見ございましたら。

南出委員、お願いします。

**【南出委員】** 先ほどの井上次長のお話の中で、すごく素敵なお話だなと。私の子どももそういった形で、昔近所のおばあちゃんから毎日出会うと飴をもらって、十何年経っても飴のおばちゃんと呼んでいて、付き合わせていただいている話を思い出しました。そういうことが全体に広がればすごくいいことですが、先ほどの学校がどれだけ託せるかというお話で、私は保護者目線で考えますと、保護者の理解も必要ではないかなと。知らない人と会話をしはいけないとか、学校の行き帰りに名札を付けてはいけないというような状況の中で、どこまで保護者の方に理解が得られるかということが課題だと思いました。

あと、数点教えていただきたいのですが、本当に無知にお伺いするんですけども、3ページの学校運営協議会と地域学校協働活動のそれぞれの立場とか内容はすごく分かるんですが、現在地域でお力をお借りしている方々が高齢化しているというのは事実だと思います。その中で、好意的にお力を貸して下さる方々の中には両方に関わっておられる方もおられるのではないかなという中で、2本柱ではなく1本化していけないのかなと感じました。

1本化というのは難しいのでしょうか。

それと、前回の定例会では、コミュニティスクールの予算は県から下りてくるものだとお伺いしていましたが、やはり内容がどんどん大きくなって行って善意だけで維持継続していくというのは難しいことだと思います。その中で、県から下りてくる予算だけで賄っていくものなのかどうかを教えてください。

【栢木市長】 井上次長。

【井上教育部次長】 1点目の両輪を1本化にということですが、コミュニティスクールの理念というものがこの両輪でやっていくということです。ただ、おっしゃってることは分かります。実は兼ねておられる方はかなりおられます。その中で、どう人材を発掘していいのかということですか。

これは一般市民の方からお電話をいただいたことなのですが、最近通学路の安全が言われていてスクールガードの方も立ってくださっているんですが、それでも手薄なところがありますので、親として何人かでグループを作ったので見守り活動をしたいがどうしたらいいかというお電話をいただきました。この指とまれ方式というらしいのですが、例えば、子どもが学校へ行くまでの間だったら見守りができるとか、こういう小さなグループで見守りをしたいという方の力も借りられるんですが、これも理想論ではありますが、地域の中で点在している人たちをどういうふうにもとめていくのかということが難しい問題です。発掘はできても、それを組織化していく、まとめていくということが非常に難しいと思っていますので、そこがまちづくりの課題というところにもつながっており、学校だけではなかなかできないところですし、地域だけでもできないところです。そこに、まとめていく仕組みをどう作っていくのが課題だと思っています。

それから、2点目の予算の問題ですが、現在はおっしゃってくださったように、県の補助金を使っているのが現状です。できれば地域学校協働活動推進員の方にいくらかの報酬をお支払いして、善意だけでなく仕事としていけるようにならないと、今言った地域の組織化や地域の声を拾っていくということもしにくいと思いますので、それについては考えていきたいと思っています。

以上です。

【栢木市長】 南出委員、どうでしょう。

【南出委員】 分かりました。

【栢木市長】 ありがとうございます。

教育長。

【西村教育長】 今のことについて、そもそも発想の違いがあるかなと思っています。

基本、行政は発掘して、この指とまれと言ってそれを組織化していくということとはしないことになっているのではないかと思います。学校は逆で、そういうことをまとめて組織化して自立できるようにサポートしていく。それは育てるという発想がものすごく強いんです。その対応の違い、教育委員会がこれをやろうといっても、行政職員からすると、それは教育委員会の仕事だということになるのかなと思うんです。

だから、このコミュニティスクールのお話を聞いて例えば政策調整部としてはどう思うのかということも思いますし、まちづくりに絡めていくとなった場合には教育委員会だけでは収まらないと思います。

教育委員会としては、まちづくりという兼ね合いから一番悩んでいるところで、だから統一して各学校へこういうふうにしようと打ち出せていない。地域の実情に合わせて、例えば

祇王だったら、祇王のまち協との絡みは祇王で考えてもらわないといけないし、中主のように幼小中が丸丸となっているところはいろんなアドバイスをしながらできますけども。そういうこともあって、校長は何か教育委員会から方向を出してという方もいますが、それは地域の実情が違うのでそれぞれで考えてほしいと言っています。

行政として、そんな取り組み、そこまでやるのかという感じがするのですがね。私も教育委員会に長くいるので、行政は基本的にそういうことはしない、手を挙げて一生懸命取り組んでいるところにサポートはしますけども、何もないところで作り上げていくということはないということが基本かなと思うのですが、その辺どうですか。一度行政側に聞きたいのですが。

**【栢木市長】** 政策調整部長。

**【赤坂政策調整部長】** 政策調整部の赤坂です。

まちづくりという言葉から、市全体のまちづくりという意味では担わせていただけてますが、どちらかというと、大きなビジョン的なまちづくりを担わせていただけていると思っています。

本日議題となっている部分については、それよりもぐっと縮小した、地域づくりとしてのオリジナルということが先ほどからも出ていますが、そういう意味合いでの位置づけとしては少し違うかなと思います。

先ほどから議論を聞かせていただいて思ったのは、国からコミュニティスクールの取り組みを要請されていますが、やはり地域性もありますし、教科書のように決まったものがあるってこれと一緒にやればこういう成果が出ますという決まりのひな型というものは無いように思います。そういうことからすると、現在活動としてやっておられる学校応援団の関係もそうですし、評議員さんの話もあります。ダブっておられる方もいますけども、その人たちの今の活動をベースにどうにかバージョンアップすることで、ちょっとずつ変形をしながら話を進めてコミュニティスクールという形で、今あるものをどうにか生かしながらできないかなと思いました。

**【栢木市長】** なかなかズバリとした回答が出ないですけども、地域のコミュニティ、まちづくりにしても難しい課題が多いというところでございます。

他になにかご意見ございましたら。瀬古委員。

**【瀬古委員】** 教育長のほうから地域づくりとの関係をおっしゃいましたが、地域づくりを広げれば政策調整部ということになる。ここでいう「学校を核にした地域づくり」に対するイメージが共有されていないわけです。この「学校を核にした地域づくり」がどこまでの範疇のものなのか、地域づくりという部分が大きくなれば学校は付随的なものになってしまう。例えば、祇王のまちづくりというものを膨らませたら学校との関わりが希薄になってくる。「学校を核にしたまちづくり」をどういうふうに捉えるのか、そこも十分に議論をしないと散漫なものになってしまうと思います。

**【栢木市長】** ありがとうございます。他にご意見ございますか。

南出委員どうぞ。

【南出委員】 私は保護者の立場としてこの場に立たせていただいているので、今コミュニティスクールというのが全国でもそうですし、野洲市でもどんどん進めていこうとされていることは分かっていますが、先生方はご存知だとしても、一般の保護者の方はご存知ない方がほとんどなのではないかと思います。なので難しいかもしれないですが、地域性がある各学区のカラーとか形は違いますが、例えば広報とかで、野洲市の各学区がやろうとしていることを掲げた上で、今だったら人材不足ということであれば、「不足しているのでお問い合わせはこちらに」みたいなものを掲げられる場所があれば、今以上に目に止まってアクションを起こしてくださる方がいるのではないかと思うのですが、それは難しいことでしょうか。

【栢木市長】 今のご質問どうですか。

【井上教育部次長】 本来新しいことを始めようという、そういう部署があってそこが中心となって事業を展開していくというのが本来はそうあるべきだと思いますので、何とか教育委員会事務局の中でもそういう体制がつかれないかということについては、今後検討していきたいと思っております。

【栢木市長】 すぐにはいかない難しい問題でいずれにせよということで。

他にご質問等はございませんか。教育長。

【西村教育長】 最初のほうで全国の3割ぐらいがコミュニティスクールを立ち上げているというお話をしましたけども、全国の教育長会議とかオンラインで会議をしていますが、いくつかの町の話聞いていますと、野洲市で言う学校応援団のシステムしかやっていないなというところが結構あります。もっと地域の人いろいろな動きと合体していくという部分が非常に弱く、学校がこれをお願いしますと言って地域の人が学校へ入ってくるということだけで「コミュニティスクール」というところが結構あります。文科省のアドバイザーは、そこを何とかしようという形で動いておられるのが今の状況だということです。

【栢木市長】 ありがとうございます。

いずれにせよ、祇王のお話もたくさん出ましたが、祇王小学校の場合、以前から学校応援団とか、学校教育後援会がありました。地域の人から寄付を集めて、それを市の行政が抛出できないものに対して学校教育後援会がその物品を買って使ってもらおうということを、かなり前からやっていました。

そして、まち協でやったのが防災に関して、祇王小学校とコラボして、保護者にメール配信して迎えにきてもらう。その迎えにきてもらったあとにコミセンへ寄ってもらって、防災用のレトルト食品とか、かまどベンチを使ってそれで実際に温めてみんなに振る舞うということを野洲市ではさせていただきました。

委員さん方も言われましたが、情報公開といいますか、学校との関わりの中でもう一步小学校と一緒にやりたいという思いはあったんですが、やはり垣根があるというか敷居が高かった。そういう敷居を低くしてもらって、もっと地域と一緒にやっていければいいのではないかと思いを返しました。

はい、瀬古委員。

【瀬古委員】 今、市長さんの話を聞いていて、まちづくりの自主性、主体性、自由度ということと、この資料の中にある、人選をして準備会を設立するためには規則を制定して、委員は校長が任命すると。何かちょっと違和感を感じます。これなら卒にはめて校長が管理するイメージになってしまいます。コミュニティスクールはパートナーシップ、対等な立場ですから、規則で校長に任命権を与えるのはちょっと違うのではないかという感じを受けます。

【栢木市長】 教育長いかがでしょうか。

【西村教育長】 システムは文科省が見本として出しているものですので、必ずしもそれに従うことはないかなと思います。学校と地域が一体となって、その地域の子どもを何とかしたいという思いで集まる人たちをいかに組織化していくかという部分では、システムも後追いでいいかと思いますが、まずは何とかしたいという人たちを集めることが第一かなと思います。

先ほど井上次長も言っていました、制度化というのは後追いでいいのかなというふうに思います。準備会などを考えていける人をまずは集めて、話し合いをじっくりとしていくことが一番かなと思いました。

【栢木市長】 まとめみたいな回答で、確かにまずは参加していただける人に集まっていたらいい、そこでいろいろ練って、進めていってはどうかという教育長のお話ですね。

ありがとうございます。

【南出委員】 根本的な質問ですが、この準備委員会の人選というのは、各コミュニティスクールに携わる方が数人ずつ選ばれるということですか。

【栢木市長】 井上次長。

【井上教育部次長】 それぞれの学校に準備会があるというイメージです。中主小学校の準備会、祇王小学校の準備会というイメージです。

【栢木市長】 ということです。

他にご質問等はありませんか。瀬古委員。

【瀬古委員】 2つ申し上げたいのですが、1つは山崎委員からもお話がありましたが、この組織を作る上で、学校の担当者、校長も異動されるし地域の役員も全体として高齢化しているわけなので、長期間にわたって続けられる方もそんなにいないと思うのです。そういった中で、大事なことはこの資料にも書いているように、人が交代しても組織は持続可能なものにしていかなければならない。打ち上げ花火のように、最初は華々しく作ったけれど、後が尻すぼみになる仕組みや組織が行政には多いのです。しかし、「コミュニティスクール」は継続していかなければならないものですので、そこは十分に考えないと、その時、たまたまいい人がいたということでは駄目だと思うのが一つ。

それと、以前私は自治会長をしまして、つくづく思ったことは、例えば民生児童委員です。これのなり手が本当になくて苦勞している。どの集落でも地域のためにという意識が希薄化しています。民生児童委員もそうですし、補導委員とかもなりたくないという人が非常に多い。極端な人だと、なりたくないから引っ越したという人もいるぐらいです。そう

いった中で、こういう組織を作っていくということは多大なエネルギーがいるし、簡単に綺麗な図式のようにはいかないわけです。そこをどう乗り越えていくのかということが一番の課題かなと思います。

しかし、やらなければならないことは事実なので、何としても野洲の特徴を持ったコミュニティスクールの仕組みをぜひ実現していただきたいと思います。

【栢木市長】 ありがとうございます。

【西村教育長】 今、瀬古委員から人の問題を言われたのですが、全部ではないですが、いくつかの学区では本当に子どものためという思いを持った方たちもおられますので、そういう人たちをいかに束ねるかということが課題かなと思っています。高木先生にもずっと学校を回ってもらっている人々と話をしてもらうと、この人はすごい力を持っているなという人が何人かおられるという話も聞いていますので、準備委員会の立ち上げはそんなに難しいことではないのかなと思っています。そして、いかに地域に応じた形にしているかということが課題かなと思っています。

【井上教育部次長】 今、瀬古委員がおっしゃってくださったように、実際にそういう声があるのも聞いておりますし、これから自治会自体がどんどん先細りしていった中には自治会に入らないという方もいますし、役員や会長のなり手もないという自治会もいくつかあると聞いています。

このコミュニティスクールの仕組みは、将来のまちの担い手づくりをつくっていかうというものです。今は小学生、中学生ですが、あと10年経ったらこの子たちが自分の地域の中でまちの担い手になってもらえないかという思いもあり、学校だけが良くなるということではなく、結果的に地域も家庭も一緒に豊かになっていけるということが理想ではありますが、今の自治会組織の硬直化みたいな部分にも、今の子どもたちが担い手になるには少し時間はかかりますが、今から始めようかなというふうに思っております。

【栢木市長】 ありがとうございます。他にございますか。

祇王の話ばかりになりますが、まちづくり協議会も結構な年月が経ちまして、作ったときにはみんながわいわい楽しくやっていたんですが、今瀬古委員が言われたように、役が嫌だという方も出てきて、その時代その時代で変えていかないといけないのではないかと。マンネリ化で同じことをずっとしていたらだんだん組織が崩壊していくのではないかと最近実感しておりますし、まち協のほうにもそういう話をしております。

このコミュニティスクールについても、難しい時代にこういうことをしていかないといけないのではないかとということですが、何もせずじっとしていても駄目だということで、一歩踏み出して地域に根差したコミュニティスクールを作っていくといけないと思いました。

他にご意見。本田委員どうでしょうか、何か一言。

【本田委員】 本田です。正直申しまして、コミュニティスクールの概念すら最近まで知りませんでした。今お話を聞いていくうちに問題点や課題がいろいろ浮き彫りになってきていますし、各地域、各々特色を持ったコミュニティスクールを目指されるということで頑

張っていただきたいと思いました。

以上です。

**【栢木市長】** ありがとうございます。皆さんからいろいろご意見をいただきました。

そろそろお時間になってきました。いろいろご意見、ご提案をいただきましてありがとうございます。執行部におきましては、このご意見、ご提案を踏まえまして今後、本市のコミュニティスクールを推進するように努力してください。

長時間にわたりご協議いただき誠にありがとうございました。以上をもちまして、第2回野洲市総合教育会議を閉会いたします。ありがとうございました。

— 了 —